

致  
凡世若富而多財  
人の自由も亦ある  
其の如く世も亦  
とある世も亦  
世も亦  
世も亦  
世も亦



そのおどろきなるまほしき  
情のみよあやうき一何下  
神徳の自在ありき  
ありて賢愚を判つ所あり  
き孝貞の是非も思飛  
き物すて其趣のあはれきん  
きさふさふしとのたまわ、あはれ  
きさふさふしの一何下も免

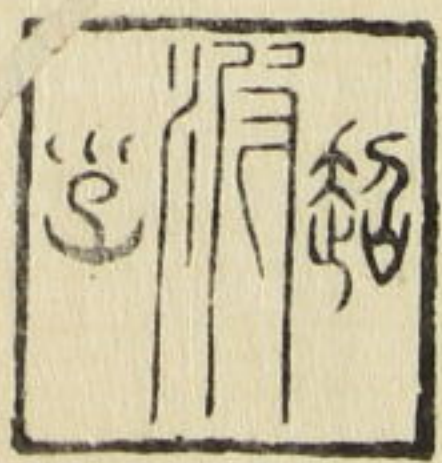
と梨廿日よまの内の富地あり  
あつて一女一徳仙の福をい  
ぬたのふはさるのさる年  
あつては縁めまうつさ進獅子  
と物さつ自この様は  
きたの徳ありあはれ  
はる

持少庵あはれ

月を吐出家

月を吐出家

長谷徑清獨菴識



菊桐のま井城ささ小牡丹哉

百菴

青簾しる筆の替る新 起波

新通辞少ハ嘘も交れん 魚貫

こかれ物より 舞盤の玉 湖十

月夕樹屋の木葉れ旬書ひ 故一

新の初とふ貝の尖り 次

又こゝろ一室の市に倒れり  
 十のきし四此四板七板  
 義政の物好くし靴靴靴  
 俣俣乃色々の首付く色  
 新二人泣きし寐る花のう  
 実あゝゝわゝゝぬろけ占  
 氣の押い浮女も表はり  
 さはわゝ舟いづあゝも夜  
 十菴波次一十菴波

泥龜も目かこ守初看  
 又神託も軍務いゝゝ  
 花の山小判もろるまきま  
 辛夷の枝か一質き  
 春の句龍の考と看る  
 温純ゝゝゝゝゝゝ舟切  
 一足か太子の足れ侍軍  
 敵もさゝゝゝ梅の形  
 一十菴波次一十菴波

蚊柱ハ嚏を引くは清々の  
 原の秤之尻より作事  
 庚辰新一姫の才ハ廿三  
 府中と社ハ喝くる為  
 織る麻ハ袖ハ焚火ハ透通  
 二反と四反強の身ハ刻  
 小狐のいんまや指ハ牡丹の月  
 夏と〜海と里ハ木兔  
 一十花波次  
 一十花

確ハ拱く〜ハ跡ハ作  
 森と林ハ幸〜ハ分テ  
 丹垣身沼津一風ハ路〜ハ  
 山家の鳥毛母〜ハ  
 立〜架差あつた時ハの貞  
 二十ハの海苔あ〜ハ  
 一十花波次  
 一十花

楊貴妃の獅子を怖るる母如

玉牙

蚊もあつらふ翠帳の風

湖十

短尺若くはあハッお切らぬ

其蒼

泪布のあはれ守るる影

起波

糸の月籠れ縄ハ十文字

平砂

おうしといふ鳥のちいさき

蒼

十 牙 波 十 蒼 牙 十 蒼 牙 十 蒼  
十 牙 波 十 蒼 牙 十 蒼 牙 十 蒼  
十 牙 波 十 蒼 牙 十 蒼 牙 十 蒼  
十 牙 波 十 蒼 牙 十 蒼 牙 十 蒼  
十 牙 波 十 蒼 牙 十 蒼 牙 十 蒼  
十 牙 波 十 蒼 牙 十 蒼 牙 十 蒼  
十 牙 波 十 蒼 牙 十 蒼 牙 十 蒼  
十 牙 波 十 蒼 牙 十 蒼 牙 十 蒼  
十 牙 波 十 蒼 牙 十 蒼 牙 十 蒼  
十 牙 波 十 蒼 牙 十 蒼 牙 十 蒼

十 牙 波 十 蒼 牙 十 蒼 牙 十 蒼  
十 牙 波 十 蒼 牙 十 蒼 牙 十 蒼  
十 牙 波 十 蒼 牙 十 蒼 牙 十 蒼  
十 牙 波 十 蒼 牙 十 蒼 牙 十 蒼  
十 牙 波 十 蒼 牙 十 蒼 牙 十 蒼  
十 牙 波 十 蒼 牙 十 蒼 牙 十 蒼  
十 牙 波 十 蒼 牙 十 蒼 牙 十 蒼  
十 牙 波 十 蒼 牙 十 蒼 牙 十 蒼  
十 牙 波 十 蒼 牙 十 蒼 牙 十 蒼  
十 牙 波 十 蒼 牙 十 蒼 牙 十 蒼



猪古彦津の舟から枕し  
之しらける風の横がら  
武彦四八状を籠と泊しけ  
るし  
舟出天の津し神以  
魁星冬塵の毎天小うけ  
しや米の舟仕上る

牙波十菴所

足袋華どらぐさる龍波留  
芦とまきく籠とまき  
るあんぬと盧生いのまぬ者  
軍配困けのまきし  
林拂は花の傍川ひら  
藤の下まき箱とまき

菴十波牙

雞の浴界思はん若常か

岷車

寐ころふ人哉起寸粟飯

起波

本陣の廁小籠をちるすれ

文十

多々後の自悔と入

湖十

琴爪小指をくもる月の興

三升

口を付れとちれるの宴

久

秋ハ重中ノや佳後のノを  
 歌の季冬四十七八  
 孝見物こころ向くと立侍し  
 投とあつくと井ハ落るぬ  
 宮念佛持木とくは松園  
 寅の対りくはハ吹出  
 元船め階子一挺あつと海  
 泉の流れ疾お山伏  
 十糸波又糸外十糸波

上七

旅人ハ一丈の浪世も何ぞおす  
 乳子あつと付孝のねた力  
 缺くと仇ハおとせぬ花造  
 黄色ハ梅子黄なる鶯  
 聖堂ハ對御殿とくは  
 上水方工 経書とくは  
 南とくは深出とくは聖の雨  
 日光素の飯次とくは梅  
 波又糸外十糸波

上七

枝小枝ひきく葉小枇杷持ち丈  
 側強急の存家と使え通る情  
 才分鞆の似合小生似ま  
 色香とくく通る四橋  
 乾の卦れそあさ横之節  
 顔と活寸七厘の丹石  
 榎古の由来はく枝の目  
 編り物冬風流きしがち

末 十 才 小 波 十 末 十 才

七

靱靴の畑はくち里はた  
 小天狗とは夏くまのる  
 颯埃と巴あ吹あし  
 四次泊も一しし先  
 足軽いあさ危補(むのた右  
 竹小似くく竹鹿杖

末 波 十 才 十 才 末

七

木爾

ほうまじのもちきり  
 氣を吐きまわす  
 三杯四杯双六  
 能子鼻の遠  
 片側ハ素舟  
 ころハこころぬ

湖十  
 茶井  
 超波  
 平砂  
 井

猿旦一子猿子向く相馬  
 乳母、子借と殿の定紋  
 伏せく因符の阿弥陀と唐土  
 餅の付まつし道中くは  
 海のあると歌うはつと浦の波  
 海妻舟の荒くもと斬  
 不筆の伝名は是のくしとた  
 とくしけ葉ニニ十貼  
 波糸十井砂波番十

朝の月崎き返は鮎鯉  
 扱く階よりくうるも拭  
 腰、立耳、ゆえるはの鳥  
 むしとち思送るはわらうとよ  
 むしとち思送るはわらうとよ  
 尻むしりの神は河地多ん  
 振上る為ハ相馬の都風  
 高きもちまかの右作倉道  
 十波砂井糸十井砂

うろろり落る雨うろろ表  
 七つ出るるの塔此新法師  
 引眉のほくはきよと鏡立  
 一里もろりか歩り心中  
 流星輝おけらるる松道近  
 うろろりけと遊子伯陽  
 訓蒙圖彙首の生樹もまじし  
 不ろろり葉のまろ報杏  
 井 砂 波 十 亦 砂 波 十 亦 砂 波 十 亦

柱物屋と石中の町くまろ安  
 日蓮一字と名く振 十 井  
 浪列くけ四日の高軒 示  
 うり傍向けも丸曜七曜 波  
 赤貝小入れくろろる如也漆 砂  
 蕨もあふ答らぬ錯師 淨

可容

曲み草句のむの奢可那

藤とはあまきくぐりや藤雀 超波

沢魚あふ切るあを付て 其條

呑ぐりく柔のくくは文 湖十

をのり方の外方と柔小目押 松宿

絲 瓜 若皮とりのも好く 二川



山雀子砂糖一介添く茶  
 傘のもしもりおかり傾城  
 祈禱若の身乃志縁衣初  
 平目と竹と勢もり  
 葦店ハ下樹心を多く道へ  
 床几持く物枝あつへ  
 刻練く血の面と人にせ  
 管提灯ハ素名るらりあり  
 十波有川條十有波

春の初は白魚寸ありまじ月の色  
 手袋の奥を一口キはらし寸  
 志生と頼め大工切怖く  
 又仕立を屋を呵る虚を僧  
 火ハ燃く火をもつ枯一物  
 所ハはち持出寸  
 長ハ裁入合せくの小ハ島  
 相言足袋と踏度けりあり  
 有川十條波有川有

刻海老の髭より長く丈婦お  
 けあひくぬ津浜町すら  
 三人いづれも欠寸唐申  
 腰よりけくは位ぬ建い子  
 湯治の翁無きし鞭と拂い  
 木より心家大浦よりうら  
 と一度此字はちる月ノ漢  
 うさいさうりーるも松梅吹け  
 十 客 川 舟 條 波 客 十

扱袖のさうく飛寸梅もど紀  
 小判見せりいわるい惚わ  
 佛壇は何ても長い罔 兩  
 をくち大根の法を信即ん  
 堯より猪鉄炮玉は背より  
 蹴上のちや中ねん燕  
 條 川 波 客 有 條

紅圍や牡丹子替影法師  
園二  
必平楊舟唐墨の形湖十  
料理人鯉乃加其の法は小松風  
鞘と柄ありわつ法中習超波  
五寸伸ひ七寸のびく根の舟車葉  
枝の實れ下くくや寸里の子執筆

近世尔宇治や山田の舟詣  
 夢の神の時の名に名をて墨  
 折紙の意ハ鏡母讀疾し  
 茶師の日よて琉璃の一天  
 面を讀け足み此の根引掛て  
 能く礼をせざるは字遠  
 屋上釘の合習し小柄生りく  
 一し時とんく 梅の梅付  
 十二波 葉 九 十 二 波

鶴が木し感陽宮を思ひ出  
 十日 菱ハふい月お市し  
 酒中花や又ふくも一 圃  
 大キ 豆成をさくく藪入  
 口ゆく菌をさく向ふさくさ  
 種 映 葉 少く物休り付  
 鏡 照る後の物とて 經山寺  
 油 扇 牙 雀 ち ち ち  
 十二波 葉 十 九 十 二 波

振袖の鞆の度ニ魏王  
起請りしをいと仮名神の志  
遠あはれおつるも云く  
あり方根不獨の落着  
早梅もあまの糸と漏りか  
百投也いとぬい後の  
田安のや廿六夜と通り  
新風もあまの松乃幸

二波原地十二波原

拾いつの際に蜜柑新  
多佛講母隣に様嫌  
害へ水もあつても波  
火あらずり西月の餅  
いものりか半室の  
初あつりあは東

十波地二波原

銀の鎰を落して牡丹哉

初篁

薰風近ま伽羅鞍の窓 超波

鳥毛振糸かゝるは是取子 掌女

後村の和哉 琴む里人 湖十

狸ニ小鏡を突ツける市ノ月 波

壁ノ通カは海ノ舟ノ 奇 ぬ

薺へ櫻移るるの原乃末  
 又手の筋子と満る晴那  
 原さ文ぬしめ顔て朝み折  
 屋甲手の女大より替へ  
 四五日れうちふ越へお秩父山  
 舞子系社と葛の風負  
 泰福のやうえと埋る回も少  
 枳殻垣乃菴冬咲捨  
 十 女 十 波 十 女 十

雑兵の男子朝鮮とるんが徳  
 紫雲派のとふお起  
 鑄かろしの花瓶乃重何貫目  
 ちのうなる海苔汁は沈  
 梳飯と九十三騎子ま是ら寸  
 守佐ハ幡の廢る世中  
 鷺の首長い替り不角み也  
 強市へあれと替は刈取  
 波 十 女 十 波 十 女 十

松喬の心昆布五物書、秋の層  
 是をばあつて一はの月  
 新造の石根くやのつゆけ  
 昔藤く赤も三味流る清々  
 ウニカウル削りくく物楽の音  
 手心書く人の神子  
 鶴と止て鶺鴒の名は生残  
 茶の花咲も茶光州前

十 篁 波 十 篁 波 十 篁

三尺の劔の末と思つて  
 地面白お天王の札  
 尉といふ顔おいもあめくま  
 薪とわらや橋の四枚目  
 花守のおハ棒若も覚へ  
 隣の花を新の足合

十 波 十 篁 波 十 篁



坐小童去人をあまの筒牡丹

南壽

扇をハなむう

湖十

新都先香屋の越ゆん

山郭

未機姫能と書し墨色

超波

羽の月ハ筭木より秋

志静

くいさし、祐と捜寸焼栗

且調

鏑流馬の役（あし）の（あし）起  
（あし）の（あし）久（あし）  
 測（あし）の（あし）並  
 患病（あし）の（あし）並  
 世（あし）の（あし）古事  
 月の（あし）乃（あし）並  
 盤（あし）の（あし）梟

十 毒 調 動 波 毒 十

死（あし）の（あし）水と（あし）  
 初（あし）の（あし）辰（あし）  
 是（あし）を（あし）貫（あし）  
 紫（あし）は（あし）散（あし）  
 青（あし）の（あし）侍（あし）  
 竈（あし）の（あし）屋  
 濱（あし）の（あし）雪

初 波 毒 十 調 動 波 毒

五世とあるは新いしき都の隈  
六よりいせ家燕蕃の葉  
平産小亭主の君ぬ、あんと  
ゆきく見ころる戸守の封  
河をみすかこの控くま所  
堯の藩固のきんをり  
芳彦の月を向くかこまり  
是とこつかりんの架刻

調 節 波 節 十 妻 節 調

末と名記と呉服祭の裾たじ  
西より海くまのりか  
飲水舟の中と出者か立  
海鹿の上おまじり  
あ存れ少し高よは花の岡  
まの形とびき物あふ

調 節 十 妻 波

美其の角を痒う侍牡丹哉  
 和専  
 袋を疾寸管の書は  
 超波  
 口起りぬ大工ハ人の顔と見  
 大漁  
 雀ささり 然乃正面  
 湖十  
 漸空之元結通ふ小の月  
 祇丞  
 形細はりあいの姿  
 漁

河のほとり秋の萩小流せし落  
とく人の口ハ唯とついで古  
腹切のふもりハ十字  
烟もあがり下ハ初づの有り  
引舟ハあはれ教へ寐なり  
とつ。南くみくおす二夏  
遠浅の捨しほふるの皆  
低く並ねる金岡、信  
波寺 魚十 波寺 十

階ハ鉢お下ても未下咲  
々ふの糸摘おあふ寸手拭  
是は朝の朝の癖く月の東風  
疵穿おあへく五と手く  
浪人のあお踏出す古葛籠  
離れあ状列寸四件くあ  
如を冷くあ石垣の葉よき  
連の羽織とくあ蓮子忌  
十 魚 波 寺 十

俵しものよこ二尖とあるく  
忽精々親舟の級  
宿帳母後田のくをゆく  
荒砥切出す瓦山の月  
鳩の芳なるまも物とある  
計りなき引袖の折枝  
筆跡の顔と並る七面  
上り細工のあり及基  
香 漁 十 波 漁 十 波 香

魚魚のほと敷く口柳の  
十九日ありてすふ日も  
武士の財布持てる的ゆ  
市前新しき色よ髪結  
咲花芳ありて一本は  
上の村くハ新あり  
香 漁 十 波 香

股立の唱石新く、婿家

卯く、此堂夜も待て、是より 起波

鐘殿の五色の原も、氣も盡く 故一

坊主の徳も、忘るる所 湖十

有、強小、妻連、此、家、中、を、入、る 菊人

能、乃、き、前、あ、る、る、一、見、観、控 一

曉雨

二葉

三葉

波 風の浦島塚、行當、  
 いまぬ、うらと瘡と能は  
 女郎ハ親法の方お徳斗  
 物や思ふと石路を投袖  
 煤し祢を鯉子の神も落付以  
 隣、菅原貝お能、合  
 軍難ハ勝もまゝ干ぬる上、  
 うゝ後をも級ハ結屋中  
 十 一 波 局 人 十 局 波

屠詫おはしとる、清の考  
 引は石路を、お投助る  
 八月お起とるの、海花  
 并出ハ折れおま、霜除  
 相領の獸おこする、大喰い  
 居風呂も居く物、のじ尾  
 行はら、白お如未ハ能、奉持  
 不賊の、おま、おま、おま  
 波 一 人 十 局 一 人 一 波

七  
 七



了ら賣元振引も丸むい  
樂屋の窓も五六百石  
烟くは抱白く風ふ向  
女匠去りく小看板掛  
此世こい産小ぬ恋丸珠勒町  
安孫魁めと袖口へ飛  
走めむ河童の唱ん海のる  
西海道のそくは白眉  
一人十波一人十

燈袴あすなる舟の飯  
百よりうとと残座叶り寸  
村雨の聲ふかきと掛と並  
俗の細工小襦袢の箱  
かい曲も糸のあより北土笠師  
着りもあしとちとと  
一人十波一人十

し

三

